

令和七年度入学試験問題 国語（五十分）

二月一日(午後) 実施

〔注意〕

- 一、試験開始の指示があるまで問題を開いてはいけません。
- 二、問題冊子は13ページあります。試験開始後すぐに確かめてください。
- 三、解答はすべて解答主紙に記入してください。
- 四、問題冊子の表紙及び解答主紙に受験番号（算用数字）と氏名をはっきり書いてください。
- 五、字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。
- 六、試験終了後、解答主紙のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってください。
- 七、試験中、机の上から物を落としたり、気分が悪くなったり、何か用ができた時は、手をあげて監督の先生に知らせてください。

受験番号

氏名

東京女学館中学校

「本当にもうこないでくださいよ」

くどいほど念を押しエレベーターに私達を押しこむと、ドアのしまりぎわに、

Y

今までのぞんざいな口調とは別人のように改まって、デパートの一階にいるエレベーターガールさながらの深々としたお辞儀をするのである。

ストレッチャーをのせる病院の大型エレベーターは両方からドアがしまる。寝巻の上に妹の手編の挽茶色の肩掛けをかけて、白くなった頭を下げる母の姿は、更にもうひと回り小さくみえた。私は、「開」のボタンを押してもう一度声をかけたいという衝動を辛うじて押えた。

② 四人の姉弟は黙って七階から一階までおりていった。弟がくぐもった声で、ポツンと言った。

「たまねえな」

末の妹が、

「いつもこうなのよ」

という。妹は毎日世話に通い、弟は三日に一度ずつのぞいているが、母は必ずエレベーターまで送ってきて、こうやって頭を下げる。しかも弟にいわせると、「人数によって角度が違う」というのである。

「今日は全員揃ってたから一番丁寧だったよ」

お母さんらしいやと私達は大笑いしながら、涙ぐんでいるお互いの顔を見ないようにして駐車場へ歩いていった。

(中 略)

祖母が亡くなったのは、戦争が激しくなるすぐ前のことだから、三十五年前だろうか。私が女学校二年の時だった。通夜の晩、突然玄関の方にざわめきが起こった。

「社長がお見えになった」

という声でした。

祖母の棺のそばに坐っていた父が、客を蹴散らすように玄関へ飛んでいった。式台に手をつき入ってきた初老の人にお辞儀を

した。

それはお辞儀というより平伏へいふくといった方がよかった。当時すでにガソリンは統制されており、民間人は車の使用も思うにまかせなかった。財閥系ざいぼつのかなり大きな会社で、当時父は一介いっかいの課長に過ぎなかったから、社長自ら通夜にみえることは予想していなかったのだろう。それにしても、初めて見る父の姿であった。

物心ついた時から父は威張いばっていた。家族をどなり自分の母親にも高声を立てる人であった。地方支店長という肩書もあり、床柱とこばしらを背にして上座に坐る父しか見たことがなかった。それが卑屈ひくつとも思えるお辞儀をしているのである。

私は、父の暴君振りを嫌いやだなど思っていた。

母には指環ゆびわひとつ買うことをしないのに、なぜ自分だけパリッと糊のりの利いた白麻しろあさの背広で会社へゆくのか。部下が訪ねてくると、分不相応ぶんふたうと思えるほどもてなすのか。私達姉弟がはしかなろうと百日咳ひゃくにちせきになろうとおかまいなしで、一日の遅刻ちこく欠勤けつきんもなしに出かけていくのか。

高等小学校卒業の学力で給仕から入って誰だれの引き立てもなしに会社始まって以来といわれる昇進しょうしんをした理由を見たように思った。私は亡くなった祖母とは同じ部屋に起き伏ふした時期もあったのだが、肝心かんじんの葬式そうしきの悲しみはどこかにけし飛んで、父のお辞儀の姿だけが目に残った。私達に見せないところで、父はこの姿で戦ってきたのだ。⑤ 父だけ夜のおかずが一品多いことも、保険契約けいやくの成績が思うにまかせない締切しめきりの時期に、八つ当りの感じで飛んできた拳骨げんこつをも許そうと思った。私は今でもこの夜の父の姿を思うと、胸の中でうずくものがある。

母は子供たちにお辞儀をみせてくれたが、父は現役のまま六十四歳で、しかも一瞬の心不全で急死したので、遂ついに子供には頭を下げずじまいであった。晩年は多少折れたようなものの、やはり叱しかりどなり私達に頭を下げさせたまま死んだ。

親のお辞儀を見るのは複雑なものである。

面映おもはゆいというか、当惑とうわくするというか、おかしく、かなしく、そして少しばかり腹立たしい。⑥

自分が育て上げたものに頭を下げるということは、つまり人が老いるということは避けがたいことだと判わかっているけれども、子供としてはなんとも切ないものがあるのだ。

（向田邦子『向田邦子ベスト・エッセイ』所収「お辞儀」より）

※出題の都合上、一部表記のしかたを変えたり、省略したりしたところがあります。

問一 文中の I・II にあてはまることばとしてもっとも適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

I ア 健気けなげ

イ 活発

ウ 息災

エ 丁寧ていねい

II ア 晴れやかな

イ 辛つらそうな

ウ 眠ねむそうな

エ 心配そうな

問二 — 線部①「四日目からはその電話もなくなった」とありますが、その理由としてもっとも適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ありつただけの十円玉を使ったために、お金がもうなくなってしまったから。

イ 病室という狭せまい空間にずっといるため、報告することがなくなったから。

ウ 日が経つにつれて電話をするだけの元気がなくなってきたから。

エ 電話をすると家族に心配をかけてしまうことに気づいたから。

問三 文中の X にあてはまる語句を漢字二字で答えなさい。

問四 文中の Y にあてはまることばとしてもっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 本当にもう来ないでちょうだいよ

イ 有難ありがとうございました

ウ 閉まるドアに気をつけなよ

エ 本当はまた皆みなさんにお会いしたいですわ

問五 — 線部②「たまんねえな」とありますが、これはどのような気持ちですか。もっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 体調が悪いはずなのに、自分たちの前で気丈きじょうに振ふる舞まう母を見て喜びを感じている。

イ せつかくお見舞いに来たのに、きまりが悪いと言われたので驚おどろきを感じている。

ウ 見舞いの品を予想より多く持たされ、荷物が増えたことに戸惑とまじいを感じている。

エ 老いた母がお辞儀じぎをして自分たちを見送る姿に、やりきれなさを感じている。

問六 — 線部③「お辞儀というより平伏へいふくといった方がよかった」とありますが、いつも威張いばっている「父」がこのような行動を取った理由を、「私」はどのように考えていますか。もっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 当時、父は一介いっかいの課長に過ぎなかつたので、社長自ら通夜にみえることは予想していなかつたから。

イ 普段から部下のことを心配し、わざわざ通夜に来てくれた社長を、父は尊敬をしていたから。

ウ 出世して家族を養うために、父は、会社の上司に対してこのように頭を下げてきたから。

エ 父は、会社で評価ひょうかされるために、会社の人が訪ねてくれば誰だれにでも頭を下げる人だったから。

問七 — 線部④「初めて見る父の姿」について

(1) この姿を筆者はどのような姿だととらえていますか。「姿」に続くように文中から十五字でそのまま抜き出して答えなさい。

(2) この「初めて見る父の姿」に対して、いっつも父の姿のことを筆者はどのように表現していますか。文中から四字でそのまま抜き出して答えなさい。

問八 — 線部⑤ 「父だけ夜のおかずが許そうと思った」とありますが、筆者がこのように思うようになったのはどうしてですか。二十字以内で答えなさい。

問九 — 線部⑥ 「少しばかり腹立たしい」とありますが、筆者が親のお辞儀を見て腹立たしく思ったのはなぜですか。四十字以内で答えなさい。

二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

日本の人々がキツネにだまされていた時代とは何か。その時代に人々はどのような精神世界をもち、どのように自然とコミュニケーションをとりながら暮らしていたのか。そのような問いをたてるとき、ここにはかなり深い考察課題があることに気づく。

① 現代の私たちの精神世界で「キツネにだまされた」という言葉を用いれば、それはあやしげな話にすぎない。しかし現代の私たちは大きく異なる精神世界で生きていた人々にとっては、キツネはどのようなものとして私たちの横に存在していたのか。② 今日私たちの精神では到達できないものがそこにあったことを、私たちは確認しておいたほうがいい。

そのような視点にたつて、この章の最後に次のことにふれておこう。それは生命の個性性について、である。

人間がキツネにだまされなくなっていく頃、村の社会から消滅していくひとつの儀礼があった。A その儀礼のいくつかはいまでも残っているから、消滅したというより形骸化したといったほうが正確なものもある。それは民俗学が「通過儀礼」と呼んできたものである。

私が暮らす群馬県の上野村から東京方面に峠を越えると、埼玉県の秩父盆地に出る。上野村は長野県の佐久地方と秩父盆地を結ぶ街道ぞいの村で、現在では街道は国道二九九号線になっている。このような歴史もあつて、上野村には佐久地方の文化と秩父地方の文化が入っている。

かつて一九七〇年代に、姫田忠義が『秩父の通過儀礼』というドキュメンタリーフィルムを撮っている。実際にはこのフィルムはおこなわれなくなった儀礼を村人に復活させて撮影した部分も多い。一九六〇年代に村の儀礼は急速に解体していき、何とかそれ以前の姿を記録しようと、細部にいたるまで記憶を残している人がいるうちに姫田が撮ったフィルムである。

通過儀礼とは子どもが大人になる過程でおこなわれる行事のことである。『秩父の通過儀礼』では、子どもが生まれる前、B 子どもが生まれることを希望する人たちがおこなう村の儀礼から記録されている。子を授けてくれるように神様にお願

いする儀礼で、それは山のお堂に行ってお参りし、ときにそのお堂で一晩過ごす儀式である。

妊娠してからいくつかの儀式がある。子どもが生まれて三日後には雪隠参りがある。かわやの神様に生まれた子を連れて報告に行く行事である。「雪隠」、「かわや」といえば便所のことであるが、いまでも一定年齢以上の人なら、かわやには神様が

ると教えられた人も多いだろう。

雪隠参りのときは、子どもの額に墨で「犬」という字を書いて出かける。これは犬の強い生命力にあずかって、丈夫に育つようにということらしい。面白いのはお参りに行くか、わやは、自分の家の便所ではなく、隣の二軒の家の便所だということである。なぜそういう決まりになっているのかは、私にはよくわからない。ともかくも、その日が生まれてきた子どもがはじめて家の外に出る日である。

それからいろいろな行事がつづき、やがて五、六歳になると、子どもたちだけでおこなう祭りや行事に加わるようになる。ここでは年長者が幼少の者たちに教えながら、祭りや行事が遂行されていく、^④そうやって子どもは次第に若者になり、大人になっていくのである。

雪隠参りなどは上野村でもおこなわれていたと村人は言う。おそらくかなり多くの儀礼や行事が秩父と上野村は共通していたのだろうと思う。上野村では一九六〇年代にほとんどの通過儀礼が消滅した。

^⑤このフィルムを見て感じることは、一人の人間の生命に対する感じ方の今日との違いである。現在の私たちは、生命というものを個性によってとらえる。たとえば、私という生命がある。あなたという生命がある。このふたつの生命は無関係な位置にあるのかもしれないし、何らかの結びつきをもった関係にあるのかもしれない、というように、出発点にあるのは個体としての生命である。

花ひとつひとつにも、木の一本一本にも、虫一匹一匹にも、もちろん動物や人間一人一人にも、それぞれ固有の生命があり、全体的世界を個体の生命の集合としてとらえる。

しかしそれは、特に村においては、近代の産物だったのではないかと私には思えてくる。もちろんいつの時代においても、生命は一面では個性をもっている。C 個人の誕生であり、個人の死である。だが伝統的な精神世界のなかで生きた人々にとっては、それがすべてではなかった。もうひとつ、生命とは全体の結びつきのなかで、そのひとつの役割を演じている、という生命観があった。個体としての生命と全体としての生命というふたつの生命観が重なり合って展開してきたのが、日本の伝統社会だったのではないかと私は思っている。

この感覚は木と森の関係をみるとよくわかる。木はその一本一本がI 性をもった生命である。だから木の誕生もあるし、

木の死もある。しかしその木は、もう一方において、森というⅡの生命のなかの木なのである。しかも森の木は、周囲の木を切られて一本にされてしまうと、多くの場合はⅢの生命を維持することもむずかしくなるし、たとえ維持できたとしても木のかたちが変わってしまうほどに、大きな苦勞を強いられる。

森というⅣ的な生命世界と一体になってこそ、一本一本の木というⅤ的生命も存在できるのである。

この関係は他の虫や動物たちにおいても同じである。森があり、草原があり、川があるからこそ個体の生命も生きていけるように、生命的世界の一体性と個性は矛盾なく同一化される。

伝統社会においては人間もまた、一面ではこの世界のなかにいた。人間は個人として生まれ個人として死ぬにもかかわらず、村という自然と人間の世界全体と結ばれた生命として誕生し、そのような生命として死を迎える。人間は結び合った生命世界のなかにいる、それと切り離すことのできない個体であった。

伝統的な共同体の生命とはそういうものである。D その人間は「自我」、「私」をもっているがゆえに、共同体的生命の世界からはずれた精神や行動をもとる。

だからこそ共同体の世界は、地域文化が、つまり地域の人々が共有する文化が必要であった。それが通過儀礼や年中行事であり、それらをとおして人々は、自然とも、自然の神々とも、死者とも、村の人々とも結ばれることによって自分の個体の生命もあることを、再生産してきた。

このような生命世界のなかで人がキツネにだまされてきたのだとしたら、キツネにだまされる人間の能力とは、単なる個体的能力ではなく、共有された生命世界の能力であった。

(内山節『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』より)

※出題の都合上、一部表記のしかたを変えたり、省略したりしたところがあります。

問一 文中の A D にあてはまる語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度用いないこととします。

ア なぜなら イ つまり ウ もっとも エ だから オ ところが

問二 — 線部①「現代の私たちの精神世界で『キツネにだまされた』という言葉を用いれば、それはあやしげな話にすぎない」とありますが、「私たち」はどのような「精神世界」にいと筆者は述べていますか。もっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 生き物のひとつひとつに命があり、それぞれに強い結びつきがあるというように考える精神世界。
イ 生命はそれぞれの個体として存在しており、儀礼ぎらいを通じて他の生命とも交流があると考える精神世界。
ウ 出発点にあるのは個体の生命であり、全体的な世界は個体の生命の集合体であると考える精神世界。
エ 生命は個別に誕生し、全体と結びついて生きていくことで、他との関係を築いていると考える精神世界。

問三 — 線部②「今日の私たちの精神では到達とつたつできないものがそこにあったこと」とありますが、これについて次の問いに答えなさい。

(1) 「そこ」が指すものを文中から二十字以内でそのまま抜き出し、初めと終わりの五字を答えなさい。

(2) 「今日の私たちの精神では到達できないもの」とはどのようなものですか。もっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「キツネにだまされる」という個人の体験をあやしみながらも受け入れる世界。
イ 地域の人々と「キツネにだまされる」という文化を共有することができる世界。
ウ 「キツネ」を特別な存在として、「キツネにだまされる」ことが信じられている世界。
エ 自然の一部として「キツネにだまされる」ことを考え、ありがたがるような世界。

問四 — 線部③「通過儀礼」とありますが、これについて、次の問いに答えなさい。

(1) 共同体の世界では「通過儀礼」がなぜ必要だったのですか。もっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 多くの人の力を借りてとり行うことによって、地域社会の持続化を図るため。

イ 個としての知恵や考えを共同体の中で生かす場として活用されていたため。

ウ 人の一生における節目を祝い、一人ひとりのその後の人生を豊かにするため。

エ 個としての人間が儀式を共有することを通して、地域社会と結びつくため。

(2) 現在でも一般的に行われている「通過儀礼」を一つ取り上げて、その儀礼の意味や目的もふくめて四十字以内で説明しなさい。

問五 — 線部④「そうやって子どもは次第に若者になり、大人になっていくのである」とありますが、『秩父の通過儀礼』のフィルムにおいて大人になるとはどういうことですか。もっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 祭りなどの通過儀礼に参加し、共同体の中でそれを伝えていく立場になること。

イ 通過儀礼の意義をしっかりと理解し、地域を越えていく立場になること。

ウ 現代の新しい考え方を受け入れながらも、通過儀礼を守っていく立場になること。

エ 行事や祭りの先頭に立ち、新しい通過儀礼を自ら作り上げていく立場になること。

問六 — 線部⑤「このフィルムを見て感じることは、一人の人間の生命に対する感じ方の今日との違いである」とありますが、当時の秩父の人々の生命に対する感じ方では、一人の人間の生命をどのようなものととらえていますか。文中の言葉を用いて四十字以内で説明しなさい。

問七 文中

I

V

 には「個体」か「全体」かのどちらかがあてはまります。その組み合わせとしてみっとも適当な

ものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア I 個体 II 全体 III 個体 IV 全体 V 個体
- イ I 個体 II 全体 III 全体 IV 全体 V 個体
- ウ I 全体 II 全体 III 個体 IV 全体 V 個体
- エ I 全体 II 個体 III 全体 IV 全体 V 全体

問八 本文の内容としてみっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 現代では、通過儀礼はその意味を変えながらも大切なものとして受け継がれている。
- イ 雪隠参りとは村中の家の便所を子どもとともに回り、村から疫病を払うものである。
- ウ 伝統的な共同体の世界では、世界から外れた行動をする人は存在しなかった。
- エ 人間がキツネにだまされるのは、伝統的な共同体において共有されていた能力である。

三次の短文中の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- 1 彼女は音楽に関してハクシキだ。
- 2 帰り道でマヨウ。
- 3 リツキヨウを工事する。
- 4 作品を評価するキジュン。
- 5 チヨメイな芸術家と会う。
- 6 カイソク電車が来るのを待つ。
- 7 イロンをとなえる。
- 8 ジツチヨクな人柄ひとがらに好感を持つ。
- 9 観覧用の席をモウける。
- 10 別の問題がハセイする。

